様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０１６７

研究課題名（和文）ニーベルンゲン伝説再発見に伴うドイツ・ナショナリズム表象の展開

研究課題名（英文）Emergence of nationalist styles.　The Reception of the Nibelungenepos in the Weimar Republic

研究代表者
山本　順子（Yamamoto, Junko）

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：８０２９５５７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：ナショナリズムの形象化現象として、フランス革命後の集団祝祭、モニュメンタルな構築物、折衷主義建築に着目し、「様式」の希求がアイデンティティの構築とかかわりがあることを明らかにした。そして、様式のもたらす記号化が、諸メディアの発展した20世紀に入って、時代の変化(第一次大戦、共和国の成立、大衆による新世界構築、視覚メディアの登場)でどのように具体化したかを具体例を丹念に収集して分析した。その過程で言語的様式化としての「概念」の操作性がもたらすパラドックス問題、可能世界のディスクール分析、フリッツ・ラングの『ニーベルンゲン』の様式分析で検証した。

研究成果の概要（英文）：Focusing on collective festivals after the French Revolution, monumental architectures and eclectic architectures as a phenomenon of nationalism in 19 and 20 century, this research shows, that the effective application of "styles" from the (particularly Germanic) past reveals the aesthetic attempts to establish the national identity. The stylization introduced by the semiotic operations on optical media (e.g. theatrical events and cinematic effects) has an ideological effect, which influences on the world view as national identity created by directed coexistence. These phenomena are here traced through the Reception of a folk epic “Nibelungen” in the modern period.

研究分野：ドイツ文化

キーワード：視覚メディア　ディスクール分析　サイレント映画　ワイマール文化　ニーベルンゲン伝説　群衆演出

１．研究開始当初の背景

1) 第三帝国のイデオロギーのもと戦われた第二次世界大戦では、連合国側と対峙する前線は帝国の死守を懸けた境界としてジークフリート線と命名された。このことが示すのは、叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の写本のひとつが 1755 年に発見されて以来派生した様々な評価が、最終的には国民の創世神話という位置づけに収斂し、伝説的英雄への忠誠を発揚していることを意味している。

2) この叙事詩の 19 世紀における一連の受容のあり方が、「国民的叙事詩 Nationalepos」という特殊な形として起こり、広い社会的現象を引き起こしていることは、多くの研究者が指摘するところである。Gyseke が「コロンブス」と名づけた再発見は、中央集権化の進まなかったドイツに新たな帰属国土を拓いたことになる。だが、「我々はニーベルンゲン族系ドイツ人が 19、20 世紀に流した血を今なお浴び続けている」（Storch）と、主張されるとき、国家統一後のアイデンティティ・イデオロギーが、ファシズム体制をもたらしたことを踏まえているのだ。すなわち、ジークフリートの不死身をもたらした血のモチーフは、暗転して犠牲の血を意味し、伝説が第三帝国の神話を用意したのである。

3) この叙事詩はかつて吟遊詩人によって詠われ、写本や書籍の形で教養読者層に受容され、19 世紀に至っては劇場で観客集団を作り上げ、さらに壁画や絵本の非言語的形象で直接的印象を高めた。しかしこうした受容史には包括的なメディア論がまだ俟たれるところである。

２．研究の目的

1)ドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』が18 世紀後半に写本が再発見されて以来、文献学的調査・研究のみならず、ゲーテ（古典主義文学の関心、韻律や情感への留意）、ドイツ・ロマン派（民族の歴史、古代・中世への言語的起源の探求）、対ナポレオン戦争（愛国心の高揚）、帝政ドイツ（国民アイデンティティの確立）等の社会的、文化的背景のもとに受容され、現代語訳をはじめ、様々な媒体に翻案された経緯を神話作用として分析する。その際注目すべきは、言語的記憶の想起作業だけでなく、視覚的原体験の創出への流れであるとし、視覚芸術のなかに神話化の演出意図を読み取ることを目指す。この造形芸術(絵画・建築・舞台作品・記念碑→映画)を媒体とした視覚的崇高体験の政治的演出を、様式化、儀礼化による国家空間の確立の過程として位置づける。

2) 視覚芸術に注目する意義は、これが19世紀の教養市民層に代わって20世紀前半に発展し、集団的均一性を特徴とする大衆層を用意したからである。ファシズムに至る政治形態や社会組織の分析は多くなされているのに反し、文化的生産、流通といった下部構造の変化がいかにファシズム的上部構造を支えたかという視点での検証は少ない。

3) したがって中心となるのは、この伝説の形象をモチーフとした視覚的神話化表現や、劇場的体験効果を具現化した19世紀末から20世紀初頭にかけての劇場・映画演出である。具体的には群衆演出、構成の様式化を検証し、ファシズムの政治的空間に可能性を開いたことを示す。

３．研究の方法

1) 19 世紀の祝祭劇・記念碑の成立史について、カントの崇高論を出発点として、スタロバンスキー(1979)、Nipperdey(1968)等の歴史家による報告を参照。

2) 『ニーベルンゲンの歌』受容史をたどる。展覧会資料、記念美術館、モニュメントなどをあたって、19 世紀ナショナリズム的神話化の発展を具体的に検証する。

3) 共同体形成論の一環として、Massenregie のコンセプトについて、マックス・ラインハルトの巨大劇場や、ルビッチュ、フリッツ・ラングに続いていくスペクタクル映画について当時の劇評などを引き合いにして検証する。

4) 架空空間構成、国家創生物語のディスクール分析。SF 論や言語哲学を参照。

5) フリッツ・ラング『ニーベルンゲン』を分析するために、監督や脚本家などの意向を把握する。同時にクラカウアーやロッテ・アイスナーら、映画評論家による詳細な論評を押さえる。

４．研究成果

1) ベンヤミン『複製技術の芸術作品』では、ファシズム的群衆操作を「政治の美学化」[①]と呼んでいる。ここでは主体個人による享受に代わる、個人を越えた崇高感が目指されている。それが市民革命以後顕著になってきた祝祭のあり方、「新しい服従の儀式」[②]であることをスタロバンスキーは示している。質量感のあるモニュメント、集団的統一行動といった特徴は、アルベール・マチエも「革命宗教」[③]と名づけるものであり、キリスト教や領邦国家といった旧権力に代わる新たな共同体的アイデンティティとなる。ドイツでは巨大記念碑、急峻な渓谷風景に民族的原体験を求め、その特徴は Nipperdey によれば「再現しているものが再現されているものと一致していないということ」[④]にあるという。ここに、意図的な抽象化、様式化への内在的な要因があるといえよう。

2) 古代ゲルマン英雄伝説を集成して 1200 年頃成立した『ニーベルンゲンの歌』は文学作品としては長く忘れ去られていたが、1755 年に写本が発見され、2 年後には抄録が活字となって公刊された。1861 年にはヘッベルの戯曲が、さらに 1876 年にワーグナーの『ニーベルングの指輪』が初演されると、こうした神話的形象の美的表出を目指す指向は芸術のジャンルを越えて音楽や造形芸術に広がっていく。その頂点にフリッツ・ラングの『ニーベルンゲン』(1924 年)がある。というのもここにはマックス・ラインハルトの舞台を手がけた Czeschka による絵本版“Die Nibelungen“ (1908 年)、ドイツ象徴派画家ベックリンによる神話世界(„Das Schweigen des. Waldes” 1885 年) との類似が確認されている[5]からだ。

さらに帝国成立期に『ニーベルンゲンの歌』が、民族的神話とみなされ、歴史的舞台の制定や、壁画や建造物などでのモニュメント化がなされたことについては、数々の資料が示すとおりであり[6]、また実際に現地取材をし、今日でもなお観光地として整備されている様を体験した。

こうした神話体験創生にはたらいているのが前述の様式化原理であることに注目し、19 世紀からの様式概念の変遷をたどった[7]。明らかになったのは、規範から個人的な創造プロセスへの意識的移行である。だが、様式が形式化すると、いわばプロセスの逆行といった、過去の様式の濫用や折衷が行われるようになる[8]。さらに保守派の論客たちは民族的様式を追究して称揚し[9]、国家的アイデンティティの創設を目指したのである。このとき様式は特定の共同体の総括的表現として機能する。

3) 次の段階の様式化現象として、20 世紀初頭の Massenregie に注目し、当初は革新左派の教化運動の一環として見られたこの舞台表現が、メディアの発展に支えられて、普遍的な時代表現に影響を及ぼすことを確認した。本来は古代ギリシャ悲劇の形態を再評価のもと、Meininger 劇などの先駆形態を経て[10]、マックス・ラインハルトがサーカス劇場で発展させたものである。彼はコロス的発話ならびにグループの配置の采配方法で、複声的効果だったものを視覚的に圧倒する効果に発展させたのである。ラインハルトは「Das Theater der Fünftausend 五千人劇場」を提唱し、観客を舞台上の群衆のひとりとして場を経験しているかのような効果を狙った。特に彼が 1911 年に初演した Das Mirakel は疑似宗教体験ともなり、近代的共同体に対して人工的一体感、あるいは仮想空間を提供していることを具体的にさまざまな劇評で確認した。

ラインハルト門下で後に映画監督となったエルンスト・ルビッチは、『デュバリー夫人』(1919 年)でこの群衆演出を映画に応用した最初の一人である。ここでは革命群衆の一体的感情がスペクタクルを呈している。当時席巻していたグリフィスなどのアメリカ映画での群衆シーンとの比較で、これがドイツ的演出であるとの評に着目し、この作品をフリッツ・ラングの『ニーベルンゲン』への先駆であるとし、さらにラインハルトから“Monumentalfilm“への道を当時の評論[11]で確証した。

4) ところでこうした仮想空間の構築は単に劇場的な、視覚的実験、しかもテクノロジーの時代になってようやく可能になったビジョンではない。仮想空間近代的世界観はカント以降、理性的思考過程を経て成り立っていることをたどった[12]。それを世界制作のディスクールへと応用するのが H. G. ウェルズをはじめとする SF 的世界観である。言語記号的操作はユートピアや地球外世界をも生み出すことを、20 世紀初頭のドイツ表現主義(Mynona, Scheerbart)に確認した。同時にそれはフッサールやフレーゲなどによる、思考の基盤を抽出しようとする分析哲学に繋がっていくものである。

だが、言語を操作して世界を定式化する試みは論理的な矛盾を生み出す。ラッセルのパラドックスと呼ばれるものは 1902 年に提起された問題である。それをめぐる議論がさまざまな思想的立場からどのようになされたかを、ヴァルター・ベンヤミンの初期言語論を解釈しながら示した[13]。これは神秘的と評されている彼の言語論に新たに分析哲学的視野を開くものである。そのことでヴィトゲンシュタインとの共通性が見えてくる。前者が消えていくチェシャ猫のイメージで記号の実質の消失を想起している[14]一方で、後者は「像は現実の模型だ」[15]と主張している。このように現実に対してあてがわれる形式の仮象性を指摘することで視覚メディアにより変容しつつあるこの時代の感覚受容のありかたを明らかにした。

5) さらに、視覚的体験の芸術的新しい試みがどのようにイデオロギー的意味を持ち始めるかを追究した。フリッツ・ラング『ニーベルンゲン』における様式化をクラカウアーはファシズム的大衆組織化と同列のものであると批判している[16]。ラングによる群衆演出が描く構図が、人間から個性を奪い、装飾模様に配置しているというのだ。実際、ラングが映画的「魔術」で物体も人間と同様に語らせる[17]と主張するとき、ベンヤミンの批判する「美的仮象」[18]が神話的力を得ることになる。

群衆演出の成立をラインハルトからたどり、ラングとの共通点を指摘、それらがいかに擬似的な共同体を作り上げたかを検証した。その際、同時代の劇評、映画評をもとに、実際どう作用したかを明らかにすることにより、帝国崩壊後のアイデンティティ獲得希

求の状況から、共同体空間の美的構築の問題点に至るまで、新たな視点を付け加えるものである。

〈引用・参照文献〉

①Walter Benjamin: Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit. In: I-1. S.384.
②ジャン・スタロバンスキー （井上堯裕訳）『フランス革命と芸術 ： 1789 年 理性の標章』法政大学出版局、1989 年、65 頁。
③アルベール・マチエ (杉本隆司訳)『革命宗教の起源』白水社、2012、第一章。
④ Thomas Nipperdey: Nationalidee und Nationaldenkmal in Deutschland im 19. Jahrhundert. In: Historische Zeitschrift, Bd. 206, H. 3 (Jun., 1968) S. 537f.
⑤Lotte Eisner: Fritz Lang. 1976. S. 74ff; Anton Kaes: Der Mythos des Deutschen in Fritz Langs Nibelungen-Film. In: Hermann Danuser und Wolfgang Storch (Hrsg.): Die Nibelungen : Bilder von Liebe, Verrat und Untergang. München (Prestel) 1987. S. 331.; Schönemann, Heide (Mitwirkender), Filmmuseum Potzdam: Fritz Lang : Filmbilder, Vorbilder Berlin (Ed. Hentrich) 1992.

⑥Joachim Heinzle und Anneliese Waldschmidt (Hrsg.): Die Nibelungen : ein deutscher Wahn, ein deutscher Alptraum. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1991; Joachim Heinzle (Hrsg.): Mythos Nibelungen. Stuttgart (Reclam) 2013; Herfried Münckler (Hrsg.) Deutsche Meister — böse Geister? Nationale Selbstfindung in der Musik, Schliengen (Ed. Argus) 2001.
⑦山本順子 (2017)
⑧Friedrich Möbius: Stil als Kategorie der Kunsthistoriographie. In: derslb. (Hrsg.): Stil und Gesellschaft. Dresden(Verlag der Kunst) 1984.
⑨ Arthur Moeller van den Bruck: Der Preußische Stil. Breslau(Korn) 1931.
⑩Peter Hoffmann: Die Entwicklung der theatralischen Massenregie in Deutschland von den Meiningern bis zum Ende der Weimarer Republik. Universität Wien. 1966.
⑪Z. B. Die Schaubühne; Die Weltbühne; Die Lichtbild-Bühne usw.
⑫Junko Yamamoto (2018)
⑬Junko Yamamoto (2017)
⑭Benjamin, VI-15.
⑮Wittgenstein : Tractatus logico-philosophicus. 2.12.
⑯Siegfried Kracauer: Von Caligari zu Hitler. Frankfurt a.M.(Suhrkamp) 1999. S.287.
⑰Fritz Lang: Die Wege des großen Spielfilms in Deutschland. In: Rolf Aurich und Wolfgang Jacobsen (Hrsg.): Werkstatt Film : Selbstverständnis und Visionen von Filmleuten der zwanziger Jahre. München (Ed. Text und Kritik) 1998. S. 165.
⑱Benjamin, a. a. O., S.368. Anm. 10.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Junko Yamamoto: Das Wort grinst --- die frühe Sprachphilosophie Walter Benjamins und das Russellsche Paradoxon, 2017, Neue Beiträge zur Germanistik. Bd. 155, Internationale Ausgabe von „ DOITSUBUNGAKU “ , 査読有、 112 頁～129 頁。

② 山本順子「様式と社会　個と普遍の力学」『愛知県立大学外国語学部紀要　言語・文学編』第 49 号、2017 年 3 月発行）査読無，127 頁～143 頁。

③ 山本順子「„Jud Süß“ の今日　――プロパガンダと芸術における表象の臨界」(『ドイツ文学研究』第 47 号､日本独文学会東海支部編) 2015 年 10 月、査読有、57 頁～64 頁。

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 2 件）

① Junko Yamamoto: Fiktionales Gewebe als Zukunftsvision. In: Detlef Thiel (Hrsg.) : Sonnenreflexe im Achteckspiegel Beiträge aus Japan. Friedlaender/Mynona Studien Bd. 5. Weitawhile (Herrsching) 2018, S. 81-106.

② 山本順子「集合的意識のアレゴリー　―フロイトとベンヤミン―」(土屋勝彦編『フロイトの彼岸 : 精神分析、文学、思想』日本独文学会研究叢書、101 号) 2014 年 10 月、46 頁～64 頁。

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
翻訳（計 6 件）
① フリートレンダー / ミュノーナ(山本順子・中村博雄共訳)『技術と空想』2014 年 6 月、新典社

② Osamu Ikeuchi: Ein Herr Anonym --- Leben und Werk. (1984) Übers. von Junko Yamamoto. In: Detlef Thiel, a. a. O.

③ Junko Yamamoto: Magie des Verschwindens und des Erscheinens. Filmische und literarische Diskursanalyse anhand von Mynonas „Graue Magie“. (1996) ebd.

④ Junko Yamamoto: Mechanopoiós. Vox und das lyrische Ich im technischen Zeitalter. (1997) ebd.

⑤ Junko Yamamoto: Erkenntniskritische Auseinandersetzung mit der modernen Technologie.

Mynonas schöpferische Wahrnehmungstheorie in „Goethe spricht in den Phologrаphen“. (1997) ebd.

⑥ Junko Yamamoto: Beiträge zu „Technik und Phantasie“ . (2014) ebd.

６．研究組織

(1)研究代表者

山本　順子　（YAMAMOTO，Junko）
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号：80295576

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし